

第3節 方法論的個人主義と歴史理論：その限界

1. 開発研究における歴史性と通時間性

上で見た石川、赤羽、ヒデーンに共通するものは、途上国の経済を歴史の中で、言い換えれば1年、1年それぞれの場所で固有に刻まれてゆく時間の中で捉えようとする立場だと言えるだろう。これは主流派の一部に見られる通時間的、通社会的な理論への志向性とははっきり異なるものである。

だが、方法論的個人主義を基礎としつつも、歴史への強い関心を示す人々もいる。ノースに代表される新制度派経済史学がその典型的な例だろう。新制度派的アプローチはナイーブな新古典派に代わり、開発研究において重要な影響力を持つようになってきているとも言われている。その名が示すとおり、新制度派を特徴付けるものは、制度の形成と役割への強い関心であり、前節で示したような制度と経済主体の相互関係についてのわれわれの問題にも密接に関わるものである。

2. 新制度派の経済史論

そこで、以下ではノースの経済史を取り巻く議論について必要な範囲で瞥見してみよう。

ここでは筆者の能力と紙幅の限界もあり、また既に多々紹介もされてもいるので、ノースの経済史理論の全貌を示すことはしない。ただ、次の点は本論にとって重要であろう。

第1にノースの議論は新古典派の合理的経済人を、歴史全体にわたって前提としている。経済主体は資源の希少性の下で、得られる財・サービスを最大化するために行動する（North[1981: 3-4], [1995: 17]）。

第2に生産を拡大する際に問題となるのは生産手段＝資本ストックであり、資本ストックは人的資本、自然資源、技術、知識によって決定される。ノー

スは新古典派が捨象した自然資源の、経済に及ぼす制約を明示的に認めている（North [1981: 4-6]）。これは西欧近代以前の経済ばかりでなく、現代の貧困国を見る際にも重要な視点であり、赤羽やヒデーの問題意識と通底するものでもあろう。

第3に重要なことは、実際の複雑な歴史を分析するためには、新古典派の狭い完全市場の仮定を離れて、情報の不完全性、取引コスト、不確実性などを導入し、それに対応して形成され、変動する制度や政治経済構造を正面から考察する必要がある、ということである（North [1981: 5]）。

第4に歴史家ノースにとっての関心事は定常的な社会での資源配分の効率性ではなく、経済の構造とその変化のメカニズムである（North [1981: 8]）。新制度派が開発研究において影響力を拡大しているひとつの所以はここにある。

第4の点は特に重要である。ノースは歴史的変動を説明するための要因として人口、知識ストック、制度の3つを挙げる。人口はそれが変化することで資源・資本ストックの相対的希少性に影響を与える。知識は資本ストックの一部として生産力に大きな影響を及ぼす。だがこれだけで歴史的変化を説明することはできない。必要不可欠なのは上記のような市場を不完全にする諸条件に対応して人々の協同、競争、組織を規定する構造あるいはルール、すなわち制度の分析である。

ノースによれば、制度の理論は、経済構造の中での経済主体のインセンティブを規定する財産権、暴力の占有を通じて財産権を規定する国家、状況の変化に応じて諸主体に具体的な選択をとらせるイデオロギーの3つについての理論からなる（North [1981: 7-8]）というのである。

3. 新制度派の限界から

さて、このようなノースの理論は新制度派歴史学の構築に大きく貢献し、主流派経済学者の間で高い評価を得たことは言うまでもない。だが、一方で

投げかけられた批判や疑問も多岐にわたった。

その第1は当然のごとく新古典派の前提である合理的経済人の適用範囲に向けられている。たとえば経済史の碩学、大塚久雄はノースとの対談の中で直接にこの点を質している。近代以前、中世のヨーロッパ等について合理的経済人という人間類型を前提として分析を行うことは、アジアについてそれを行うのと同様に、歴史像をゆがめることになるのではないかと。赤羽の師である大塚にとって人間類型論は経済史研究の中核をなすものであり、決しておろそかにすることはできないものである。

これについてのノースの次の回答は、恐らく大塚の失望を買っただろう。いわく、合理的経済人の仮定が正しいかどうかについては「解決できないんじゃないかとさえ思うわけです。ある意味では、このことに関しても、論争することに価値があるかどうかということも、多少疑いをもたざるをえないほどです。」(仮説をつくって)「その結果出てきていちばんうまくあてはまるものが解決となるのだと考えているのです。つまり行動様式に関するいろんな前提に関してそれを論議しても、解決というのはない、仮説を立てて検証の結果で判断するより仕方がないんじゃないでしょうか。」(ノース・トマス [1973: 231-2])⁷

明らかにノースは、マハルプ流の、理論の前提そのものの検証は必要なく、仮説の検証を事後的にすれば足りるという考えに立っている。それは人間類型そのものの歴史的現実への適用可能性を重視する大塚の議論とはすれ違わざるを得ない。

だが、非西欧近代への合理的経済人の仮定の拡張には、恐らくもう少し深刻な問題がはらまれている。金子はノースが前近代の隷属的な社会関係を見無視して新古典派的な選択理論を応用することは、人間にとっての自由とその制度的背景の問題を軽視することになる、と指摘している(金子[1997: 89-90])。

確かに、ノースについては、人間と資源との関係を社会的に規定する財産

⁷ ノース・トマス[1973] (邦訳) に併載の大塚・ノースによる「対談 経済史の基本的問題をめぐって——近代西欧社会の形成——」の中の発言である。

権制度の問題は重視しながら、それが主体の選択の自由に与える影響についての考慮は必ずしも十分ではない、と言えるかもしれない。自由と制度の関係は、伝統的身分関係、国家の弾圧、直接・間接の暴力の蔓延、家庭内の人格支配など、さまざまな自由の制限に満ち満ちている途上国及びアフリカの研究については、十分に注意されなければならないだろう。

ただし、金子の批判の正当性を認めた上で、若干ノースの弁護をするならば、たとえ隷属状態におかれていようとも、人間は完全に無力となってしまう訳ではない。赤羽のアフリカの「部族」共同体の中では人間類型が個の自立の無い存在でありながら、効率の点から合理的な資源配分を達成しているとされたことを想起したい。そこでの重要な含意は、超長期的な歴史の流れの中では、人間は社会関係の強い制約を受けながらも、試行錯誤を繰り返して環境に応じた生産と資源配分のあり方を編み出してゆくことができる、ということではないか。

次の論点は、ノースのように新古典派を理論的基盤とする研究者としては奇異なほどのイデオロギー（「倫理的な行動規範」⁸）重視の姿勢である。そのことはオルソンの提起した集合行為におけるただ乗り論との対話の所産と言ってよいだろう（North [1981: 10-12, 45-58]）。

ところで、既に触れたようにポプキンも、オルソンのただ乗り論を出発点としていた。ポプキンにとっての課題は、途上国の個人合理的であるはずの農民が、何故ただ乗りを乗り越え、リスクに対処するための公共財を作り出すことができるのか、を説明することだった。ここでポプキンは至極あっさりとしてフローリックやオープンハイマーらが提起した「政治的企業家」の議論を援用する（Popkin[1988: 256-260]）。フローリックらによれば、政治的企業家とは、自己の政治的利益、例えば政治的支持や名声などの獲得のために、ただ乗りを克服するべく公共財供給のコストを負う人間である（Frohlich and Oppenheimer [1978: 66-89]）。そこではオルソンのように強制や個々人への明

⁸ ノースの「イデオロギー」という言葉を倫理的行動規範と理解することについては絵所 [1998] 70 頁参照。

確な報酬なしに多数者の集合行為は成功し得ないとする悲観的な見方に従わずとも、人間が実現してきた公共財供給の数々を取りあえず説明できる。

だが、経済史をはるかに見渡して、非市場的な政治や制度までもを説明しようとするノースにとって、政治的企業家の理論も、オルソン自身の強制や報酬の必要性の議論も恐らくあきたらないものである。歴史と現実において説明を要するのは、ただ乗りを防止して公共財を供給しようとする、もともとの契機は、一体社会と人間のどこから生まれてくるのか、ということである。オルソン、フローリック＝オッペンハイマー、そしてポプキンの議論はそれについては無力と言ってよい。

そして歴史上には経済的合理性では説明できないさまざまな非効率な制度があらわれ、長く生き残る。その典型は国家である。一方、人々は全く個人合理的でないことによって自己の利益を犠牲にし、集合行為を成功させる——経済と社会の変化、とりわけ大きな激動はそれらのことによっても衝き動かされる面がある（North[1981: 45-6]）。こうしたリアリティを歴史家ノースは無視できなかったのであろう。

確かに金子や絵所が指摘するように合理的経済人の前提から出発しながら、イデオロギーを歴史変化の重要な要因と認知することは矛盾をおかすもののように見える（金子 [1997: 90-91]; 絵所[1998: 70]）⁹。ノースの言い方を借りれば、合理的経済人の前提に立つ仮説は検証の上、限界があることが明らかになったのである。が、それを補完すべく提出された新たな説明変数であるイデオロギーは、既存の説明変数とは一見折り合わない。

しかし、ノースのイデオロギーの役割への注目、複雑な現実や歴史上の事実に向き合わなければならない地域研究者にとっては、一定の評価に値するもののように思われる。そこで行き当たる問題は、そうやって現実に正面から向き合ったことで生まれて来る論理の不整合にわれわれはどのよう

⁹ ただ絵所はノースのこの「功利主義的伝統からの逸脱」がむしろセンの個人合理性を超えた動機や行動に関する問題提起と接点を有するとして積極的に評価しているようである。

に対処すればよいのだろうか、ということである。